



日の光の届かない暗く陰湿な部屋。

歩く度に床は硬質な音を響かせる。

時々わけの判らない機械の音だけが、地鳴りのような低いうなり声をあげていた。

その部屋には、大きな戸棚がいくつも並んでいる。

美しい装飾の扉を開け放つと、気が遠退きそうなほどの異様な匂いが鼻につく。

そこには、いくつもの『眼』がガラス瓶に入れてこちらを凝視していた。

深いつややかな髪のような黒。

碧海のような鮮やかな青。

生まれたての若葉のような緑。

ほころんだばかりの桔梗のような紫。

重くのしかかるような灰。

湿気を含んだ台地のような茶。

滴り落ちる鮮血のような紅。

すべて一対。ふたつの眼。

中にはいくつかの違う色の組み合わせのものまで含まれている。

わたしは、糸が絡んで動けなくなった操り人形のようにその場に立ち尽くす。

何者可の手によって奪われた眼に奪われたまま、全てを動かすことができない。

いくつもの視線が交じり合う、視線だけが混ざり合う、異質な空間。

理性はどこかへ吹き飛ばされて大きな欲望はつぼみをもたげ、花を開かせる。

呪縛のような眼差しが私を狂わせた。

両手は、無意識のうちに両のまぶたを襲う。

痛みはいつしか快樂となって、糸の切れた傀儡のように床に崩れ落ちた私を覆い尽くす。

視界は深紅に染まり、やがて深海のような濃い闇に閉ざされた。

もうなにもみえない。

ただ一瞬、ホルマリンの中でゆっくりと浮遊する私の眼だけがみえたような気がした。